

自己意識と有機体自己と社会的自己と Self-Consciousness, Organismic-Self and Social-Self

梶田 叡一
Eiichi Kajita

【意識世界における自己意識】

自分自身にとっては、自分の意識世界に現れているところだけが自分にとっての世界である。意識の及ばないところに存在しているものを想像してみることは出来るが、想像すること自体が意識世界の中のできごとであり、その結果としてイメージされたものも意識世界の中のものでしかない。また、そうした意識世界を大きく超えて広大な世界が現に存在していることは、意識世界内に現れる知識として一応は知っているとしても、これを何らかの形で実感的に認識するわけにはいかない。

こうした意識世界においては、自分自身に関する意識、すなわち自己意識が、大きな意義を持つ。自己意識（自分自身に関する感覚・感情・認識・イメージ・概念など）が常に暗黙の準拠枠（フレーム・オブ・リファレンス）となっており、これが我々の思考や決断を、そして言動を、更には生き方を、様々なレベルで枠づけ方向づけているからである。もちろん「無私の境地」に達すべく修業した特別な人の場合には、自己意識が準拠枠として機能する度合いが低くなっていることも予想されないではないが、通常の社会生活を送っている人の場合、自己意識は我々の意識世界の中核に位置し、我々の具体的在り方を大きく規定するものになっている。

こうした自己意識は、少なくとも以下のような水準ないし側面を持つ。

〔A〕〔流動的な〕気づきとしての自己意識。自分自身の状態や状況について現に意識していることや思い浮かぶことに気付く、という形での自己意識。

〔B〕〔ある程度固定し概念化された〕思いこみとしての自己意識。自分自身はこういう者（姿形や性格や好みなど）であると暗黙のうちに思いこんでいる、という形の自己意識。こうしたイメージはまた基本的には他者も共有しているだろうとの思い込みを伴うことが多い。

〔C〕〔自己に対する〕社会的自己認識としての自己意識。自分自身は社会的にはこのようなカテゴリー（国籍や所属民族は、男か女か、若者か年寄りか、職業的属性はどうか等）に入れられ、社会的にはそれぞれのラベルを貼り付けられた形で存在する、という認識の形をとった自己意識。これは社会で自分が基本的にどう取扱われるか、自分自身の社会的言動をどういう枠組みの下にコントロールするか、といった際の大枠となる社会的分類体系への組み込まれの意識であり、社会的アイデンティティ＝社会的分属の意識、「位置付けとしてのアイデンティティ」である。

〔D〕〔自己の本来的な姿やあり方の〕自覚としての自己意識。自分は本来こういう存在であり、またそうあらねばならないという、自己のそもそものあり方についての自覚ないし自己確認という形の自己意識。これは、社会的には「宣言としてのアイデンティティ」となる（宮沢賢治で言えば「自分は法華經の行者である」など）。これ

は時には、究極的自己洞察ないし覚醒としての自己意識という形をとることもないではない（たとえば「自己は本来空である」など）。

〔E〕〔(自己に関する)感情なり評価なりとしての自尊意識〕。プライドや自尊感情、優越感や劣等感、自己満足や自己不充足感、など自己評価的意識と総称されるもの。これは人を鬱的気分や自己高揚感に導くこともあり、精神的な健康や社会的な適応性とも深く関連する。

こうした自己意識の基盤には、自分自身はまさに一個の主体である、という大前提がある。しかしながら、そうした主体感覚ないし主体意識がまさに意識世界内でのものであるためもあって、自己の意識世界の背後に一個の有機体としての広大な生命の世界が時々刻々機能していること、そして、そうした有機体としての生命的働きが、意識に現れている自分自身についての感覚や意識やイメージも、さらには意識世界そのものをも、大きく支え規定していること、といった根本的な事実に思い及ばない、ということになりがちである。こうした限界性を伴いながら、我々の多くは、意識世界こそが自分という主体の座そのものである、という無条件の感覚を持つに至っているのである。

【デカルトの「私は考える、それ故に私は有る (je pense, donc je suis)」】

ここで思い出すのが、デカルトが『方法叙説』の冒頭に述べている「私とは何か」についての叙述である^(注1)。彼は次のように述べる。

かつて私の心のうちに入ってきた一切のものは夢に見る幻影とひとしく真ではないと仮定しようと決心した。けれどもそう決心するや否や、私がそのように一切を虚偽であると考えようと欲するかぎり、そのように考えている「私」は必然的に何ものかであらねばならぬことに気づいた。そうして「私は考える、それ故に私は有る」というこの真理がきわめて堅固であり、きわめて確実であって、懷疑論者らの無法きわまる仮定をことごとく束ねてかかってもこれを揺るがすことのできないのを見て、これを私の探究しつつあった哲学の第1原理として、ためらうことなく受け取ることができると、私は判断した。

次に、私とは何であるかを注意深く検査し、何らの身体をも私が持たぬと仮想することができ、また私がその中で存在する何らの世界も、何らの場所もないと仮想することはできるが、そうだからといって私が全く存在せぬと仮想することはできないこと、それどころではない、私が他のものの真理性を疑おうと考えるまさにそのことからして、私の存在するということがきわめて明証的に、きわめて確実に伴われてくること、それとはまた逆に、もしも私が考えること、ただそれだけをやめていたとしたら、たとえ、これよりさきに、私の推量していた、他のあらゆるものがすべて真であったであろうにもせよ、私自身が存在していたと信ずるための何らの理由をも私は持たないことになる。このことからして、私というものは一の実体であって、この実体の本質もしくは本性とは、考えるということだけである。そうして、かかる実体の存在するためには、何らの場所をも必要とせぬし何らの物質的なものにも依存せぬものであるものであることを、したがってこの「私」なるもの、すなわち私をして私であらしめるところの精神は身体と全く別個のものであり、なおこのものは身体よりもはるかに容易に認識されるものであり、またたとえ身体がまるで無いとしても、このものはそれが本来有るところのものであることをやめないであろうことを、私は知ったのである。

これがデカルトの有名な「私は考える、それ故に私は有る (je pense, donc je suis)」という第1原理を導く論理である。これは推論というよりは、一つの直観と言った方が良いでしょう。訳者の落合太郎は注釈の中で「普通の推理でなく、直接推理とでもよばるべきものである」と述べている^(注2)。確かに、孤絶した<我の世界>において明証的な形で「私」の存在を確認しようとする場合には、こうした思考の筋道にもなることはよく理解できるところである。

しかしながら、社会という<我々の世界>において「私」の存在を確認しようとするならば、個人の意識の中の現実よりも、外部に向けてそれが表現されたものを互いに確かなものとして確認し合う、ということの方が大切になるのではないだろうか。この場合であるなら、「私が考えている」ということを、他の人にどのように明証的な形で確認して貰うか、ということである。そうした場合には、「考えている」場としての身体（この場合には頭）が、言い換えるならば「考えている」ことを一つの部分機能として包含している一個の有機体が、問題となってこざるを得ないであろう。<我々の世界>を成り立たせている相互のコミュニケーションにおいては、互いの意識世界が表現された言葉だけでなく、表情や仕草、姿勢や態度、さらにいえば服装や化粧の仕方までが、伝達内容の相互確認の上で大事な手掛かりになっていることを忘れてはならない。意識世界ないし自己意識と有機体自己と社会的自己の相互的な関係性が、ここで問題になってこざるをえないのである。

【自己意識は本当の自分自身をどこまで反映しているか】

意識世界は現象的には私自身にとって「全て」であるとしても、その意識世界に時に外部から何かが突き付けられ、自分の意識している世界が必ずしも「全て」ではないこと、さらに言えば、自分の自己意識が本当に自分自身をどこまで反映しているものなのか不明であること、を思い知らされる場合がある。

例えば他の人たちが見ている私が、私自身がそう思っている私とかなり異なっている、といった事実の不意に気付かされるような場合である。他の人と直接に会話する中で、または電話やインターネット等を通じて間接的に会話を交す中で、さらには他の人から便りを貰ったり他の人が私について描写している文章なりに接する時に、そういう自他によるイメージの食い違いに気付かされて驚くことがあるのではないだろうか。「えー？こんな風に私は見られてたの、驚いた！」「あの人は私についてこう見ているらしいけど、本当の私はそんなんじゃない、全くの誤解だ！」などと思わせられるような場合である。

一般的に言えば、外側から「あの人はこういう人だ」と思っているところと、自分自身の内側で「自分はこういう人だ」と思っているところとでは、かなり違っていると考えた方がいい。もちろん、私たちは互いに深い関わりを持ち合う社会的関係の中で生きているわけであるから、そこでの個々人は、かなりの程度まで共有されたイメージを持ち合って活動していることは当然である。でなければ、お互いが相互に持ち合っている期待がずれてしまい、結果として期待しているところと実際とが乖離してしまって、互いに手を携え協力協同して集団的組織的な活動をやっていくことはできなくなる。確かにそれはそうなのであるが、大体のところでは自分についても相手についても重要な点では共通なイメージを持ち合っているとしても、誰もが他の人には明かさない私密的な意識世界を持っていることもあり、また自分で気付かないまま（無意識の内に）相手に向けて表出している言動が少なからずあることもあり、互いに持ち合っている自他のイメージは、その深いところでは互いに食い違っていて当たり前、と考えなくてはならない。長年連れ添ってきた夫婦が、高齢になってからでも互いについて新たな発見をすることがある、という事実は、そうした自他についての想定食い違いが少なからず存在するということを如実に示しているのではないだろうか。

外側から実際に他の人達に見られているところと、その人が自分は他の人達からそう見られているだろうと想定しているところ（あるいは他の人からこう見られてほしいと願っているところ）と、その人自身が外部に漏らさぬ私秘的な部分を含め自分自身についてイメージしているところとは、はっきりと区別しておかなくてはならない。「私」という存在は、基本的にそうした多重性を持っているのである。

社会的環境の中で活動している個々人は、現実には、それぞれ一個のまとまった有機体であり生命体である。これと同時に、自分自身の側から言えば、私達は外部の人たちの目からは隠された（私秘的な）意識世界を持っている。その人自身が見たり聞いたり感じたりしている世界、こだわったり考えたり嬉しくなったり腹が立ったりしている世界である。そして個々人にとっては、この独自固有の意識世界こそが直接的かつ具体的な意味での「世界」なのであり、この意識の世界の他にはそもそも「世界」は存在しない。こうした意識世界を、主観的には生きていることになる。しかしながら、先にも述べたように、この意識世界を支えるものとして1個の有機体としての生命的世界があるわけであるが、我々の意識世界には自分自身のそうした有機体的な生命活動について、ごくわずかな部分しか反映されていないのである。

【有機体自己＝生命世界と意識世界と】

どんなに意識化に努めても1点だけ意識化され得ない主体的機能が残る、といった先述のデカルト的発想は、意識世界だけを考えるという立場からはそうであるとしても、生命機能全体を担う有機体自己を基盤に考えるという立場からは、大きな誤解を招くおそれがある。本来は、意識世界の基盤として広大な生命的活動の世界（有機体自己）が存在するという事実が多面的な形で気づいていかねばならない。つまり、意識世界に現れているものの全てが、そこでの自己意識として自分自身こそ生命世界全体に対する主人公であるという思いこみも含めて、生命世界という基盤から与えられたものであるということに気付いていかねばならないのである。このためには、生命的活動についての意識世界での気付きや認識を進め、意識世界そのものに対する生命的活動の支えや影響について理解を進めるなどに努めると同時に、意識内における自己内対話とそれを踏まえた決断が全有機体を挙げての方向づけとなるようにも努めていかなければならないであろう。このことは、端的に言えば、図1に示すような形で「天動說的自己観から地動說的自己観への転換」と我々が呼んできたところでもある（注3）。

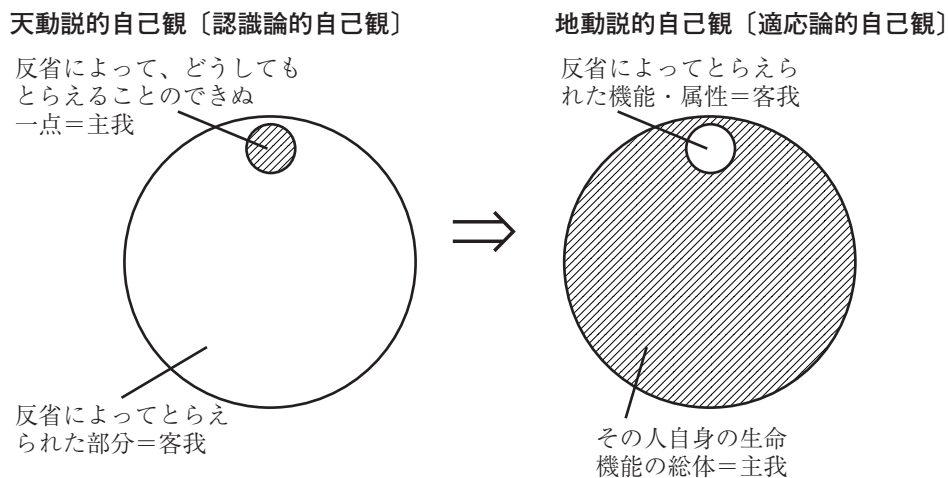


図1 天動說的自己観から地動說的自己観へ

「有機体としての私」と「意識体としての私」とは別物であるが、当然のことながら両者の間には密接な関わりがある。有機体自己＝生命体自己であることを考えると、意識世界、特に自己意識と有機体自己との間には、(膨大な)生命活動とその(一部の)意識界への反映が、多様な形で存在することは改めて言うまでもない。こうした両者の間の連絡連携の具体について、ここで少し考えて見ておくことにしたい。

有機体自己と意識世界との最も日常的な連絡連携は、意識されたものとしての「欲求・欲望」と「内的促し」であろう。生命体は、その存続のために、あるいは発展のために、極めて多様なものを常に要求し続けている。それが意識の場へ上がってきたものが、「あれが欲しい」「これを手に入れたい」といった「欲(欲求・欲望)」である。このように意識化されて始めて、生命活動にとって重要な意味を持つ「要求」(のごく一部)を充足させるもの・ことが、合理的な形で手に入れられ、有機体＝生命体のために用いられることになる。また、内的な「要求」は、ある行動への「(内的)促し」という形で意識化されることもある。「あれをしてみたい」「このことをやらなくては」といった促しである。こうした「(内的)促し」によって実際の行動へと動かされていくことになるのである。

これとは少し違う形のものであるが、同様に日常的なものとして、「体験の意識化」と「記憶の想起」もある。体験そのものは生命活動の一環として常時生起しているわけであるが、その一部は意識化され意味づけられて経験となる。これによって体験は意識界で位置付けを持ち、自己内対話の素材となったり、判断や決断の際の内的土台となったりするわけである。さらには、そうした体験や経験が意識されないまま常時蓄積され、ストックされているわけであるが、この一部が何かの折に想起されて意識の世界に入ってくることもあるのである。

これらに加えて、生命活動そのもののイメージ化という意味を持つ連絡連携が、有機体と意識体とのインターフェイスの機能を果たすものとして存在する。夢とか空想をも含む「イマジネーション」といった形のものである。フロイトやユングら精神分析派の人たちが、内的葛藤や精神的な傷など意識世界から通常隠されているものが、夢の中に、あるいは連想の形で外部に顕れてくることを指摘したことは、重要な意味を持つ。この延長上に、その人が書いた文章や口にした言葉の中に、あるいはもっと広くその人の言動の全般に渡る領域で、当人の気付いていないその人の内的な生命活動が表に現れることがあると考えていいのである。「言い間違い」や動作の上での失敗などの裏に隠されている意識下の動きを探ってみようという志向は、ここから出てきていることは言うまでも無い。

さらには、生命世界＝有機体自己の最も深部からの、本源的自己(魂)からの導きなりメッセージなりを想定してみたい場合がある。ユングなら意識世界の基盤に個別的に無意識の世界が、そしてそのもっと深い基部には集合的な無意識の世界が想定されるとするが、そうした集合的無意識の世界もまたここで言う本源的自己(魂)に含まれると考えてよいであろう。例えば誰かと親友になる、恋人になる、あるいは結婚して伴侶になる、といったことも、後から考えてみると、自分の意識世界での選択なり決断なりというより、意識していない心の深部の動きに導かれてそうなったのだと思わされることもある。人生の様々な岐路にたつて一つの選択をする際、どうしてもそうした思いを持たされることがあるのではないだろうか。また、自分がある好みを持ち、ある志向性を持っていることに気付くといった場合にも、そのよってきたところが自分自身の心の深部に根柢を持つように思われる場合がある。さらには、自分の人生に対する根本的な充足感のようなものも、こうした本源的自己(魂)といったところから来るように思われることが少なくないのではないだろうか。佛教やキリスト教やイスラム教などトインビーが言うところの大宗教のそれぞれは、結局のところ、こうした本源的自己(魂)のレベルにおいて心を問題にしてきたと言ってよいのではないだろうか。

【有機体自己と社会的自己＝社会的アイデンティティと】

ここで、「私」＝自分自身ということについて、基本的な視点なり立場なりごとにその在り方を整理しておくことにしよう。まず「有機体としての私」＝有機体自己が存在するが、それは具体的現実的には、世間とか社会という<我々の世界>を生きているわけである。そこでは自他に広く共有される「社会的イメージとしての私」＝社会的自己が機能することになる。そして、こうした有機体自己と社会的自己のごく一部をも反映させてはいるが基本的には個々人に独自固有の意識世界は、自分自身に対してのみ開示された「<我的世界>を生きる私」＝意識体自己と言ってよい。こうした意識世界は、<我々の世界>の側から見る ならば有機体一人ひとりの顔の裏側に秘められた私秘的な内面世界、ということになる。

さて、社会的環境の中で活動している有機体自己が、そのまま周囲の人々にとって共有のイメージ＝社会的自己になっているわけではない。通常は有機体自己のさまざまな現れや活動を何か象徴的なラベルに集約して意味づけ、共有されるイメージとして社会的に通用させている、と言ってよい。これが社会的自己の中核となるものとして、社会的アイデンティティと呼ばれてきたものである。

社会的アイデンティティとは、簡単に言えば、社会的環境で活動する際に個々人に貼られられるラベルである。そのラベルは、「〇〇地方出身」「〇〇一族」「誰々の子ども」などといった出自や、「派遣社員」「零細企業の社員」「一部上場会社の部長」「医者」「政治家」などといった職業的なもの、「男・女」「若者・高齢者」などといった社会的立場づけにかかわるものを含む社会的役割や、「ノーベル賞受賞者」「芥川賞作家」などといった周知の業績に関するもの、「女優」「落語家」「アイドル」など単なる職業ではなく一定のキャラクター像を呼び起こすようなもの、さらには「織田信長」「豊臣秀吉」「徳川家康」や「鈴木大拙」「湯川秀樹」などといった著名な人の場合にはその人の名前自体が固有のラベルとして社会的アイデンティティとなっている場合もある。

いずれにせよ、一人一人はその社会的ラベルに応じて一定のステレオタイプ的なイメージを持たれ、それに相応しい一貫した扱いを周囲から受けることになるわけである。これによって社会的差別を生むことも往々にしてあり、その点では問題があるが、社会的アイデンティティ抜きで極めて多様な一人一人にそれ相応の社会的対応を準備することは不可能である、ということも十分に理解しておかなくてはならない。特に社会的アイデンティティが、多様な個人を複雑に分化した組織分業的社会の中に位置づけ協同的に機能させるために不可欠なものであるという点については、十分な認識が必要ではないだろうか。

さて、社会的な状況で各個人は一個の有機体として他の人たちと相互活動をしているのであるが、その有機体自己は社会的アイデンティティの意識によって枠づけられ、「他の人たちに見せる私」（「提示自己」）として外的社会的な世界との間を繋いでいる。この「提示自己」が、有機体と社会とのインターフェイスの機能を果たしていると言ってよいであろう。つまり「世間的な期待から言って自分をこのようなものとして見て貰わなくてはならない（位置付けのアイデンティティ）」「自分の気持ちとしては自分のことをこのようなものとして見て貰いたい（宣言としてのアイデンティティ）」という意識に添った形で自分の服装や表情を整え、言動を整え、外的な世界に向けて表出しているのである。その整えられた外的な姿が、つまりその時その場でその相手に向けて表出された姿が「提示自己」ということであるが、それに対して周囲の人がまた表情や言動によって受容したり批判したりすることによって、意識体としての自己は自らの「自己提示」のあり方の軌道修正を図ることになるのである。

このようにして、一個の有機体としての自己は、意識世界を媒介とし、特に自己意識を大きな準拠枠として、現実的社会的な場において自分自身の社会的自己を自他で共通理解しつつ、他の人達と協力協同しながらの日常生活を生きていくことになる、と言ってよいであろう。

以上、この小論に述べてきたところの概要は、ここに図2として掲げたような形で図示することができるのではないだろうか。この図をも参照して御理解いただければ幸いである。

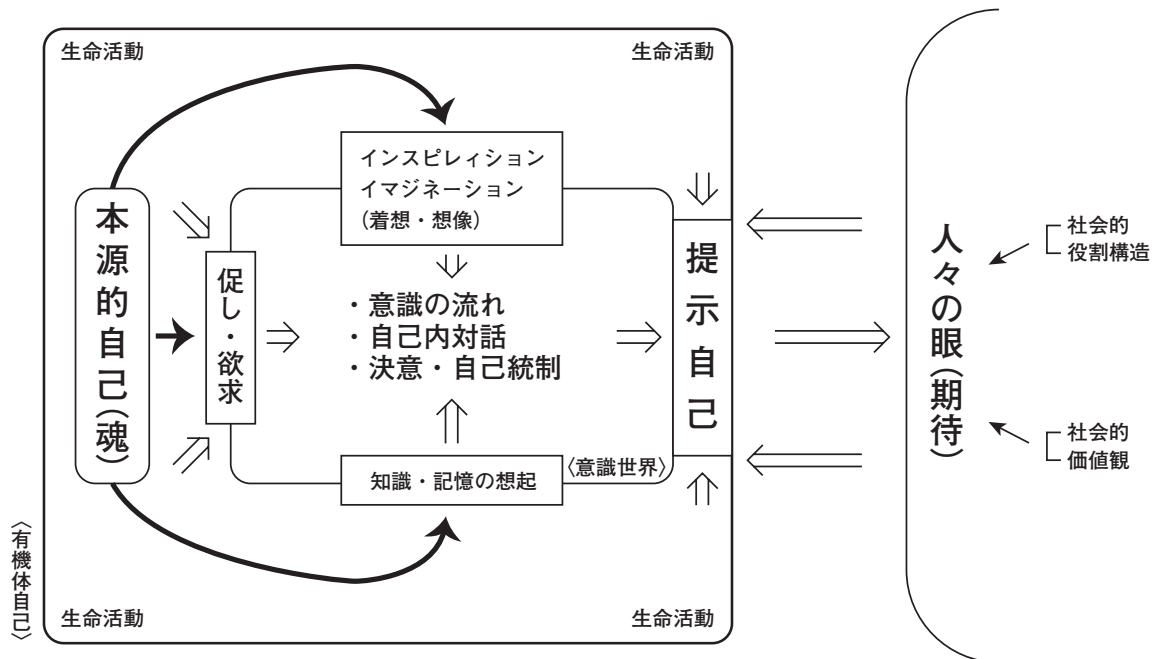


図2 〈我々の世界〉における有機体自己と意識世界

(注1) デカルト『方法叙説』(落合太郎訳)、岩波文庫、1953年(原著刊行は1637年)、p41～43。引用に当たって訳本の漢字表現などの一部を改めている。

(注2) デカルト『方法叙説』(落合太郎訳)、岩波文庫、1953年、p201。

(注3) 梶田叡一「自己幻想からの脱却と<いのち>の教育」、人間教育研究協議会『教育フォーラム 44』金子書房、2009年、p10～21。(梶田叡一『<いのち>の教育』ERPブックレット、ERP、2013年。所収)。
梶田叡一・溝上慎一(編)『自己の心理学を学ぶ人のために』世界思想社、2012年、p180～182。

【関連文献】

梶田叡一『自己意識の心理学〔第2版〕』東京大学出版会(UP選書)、1988年。

梶田叡一『内面性の心理学』大日本図書、1991年。

梶田叡一『意識としての自己——自己意識研究序説』金子書房、1998年。

梶田叡一『自己を生きるという意識——<我的世界>と実存的自己意識』金子書房、2008年。